

「 自分の手でチャンスを掴む 」

～貧しいから良い職に就けないと決めつけない～

9月から新学期の始まったアフィフェ村のデバインスクール。学校の長期休みになると村から離れて親類の家で過ごす子どもも少なくありません。その為、新学期が始まった週は学校に来る子どもがとても少なく寂しいものがあります。それが二週間三週間すると、だんだんと子どもたちも増え通常通りの学校となってきます。生徒の中には新しく来た子どももいれば、反対に親類の所に行ったままそれっきり戻ってこない子どももいます。実際、私の現在の住まいは首都アクラの貧困層の住むゾンゴと呼ばれる地域にあります。アパートの大家さんはムスリムのアラジ。アラジは5年くらい前に家長が亡くなったということで隣の国トーゴから親戚の子ども3人を預かり住まわせています。こうして、子どもを取り巻く環境は様々なものがあることを改めて実感しています。現在、日本においても子どもを取り巻く環境は厳しいものがあることを痛感しています。ガーナよりも厳しくもあり悲しく感じる事件もあるなどして、本当に今、日本の子どもたちはとっても大変なのだと思いが痛くなります。(ガーナには餓死が無い)と言います。実際にこの事は自分も感じています。海外を援助している日本で餓死が起きているなんて、実に悲しい世の中になってしまったものです。

話が今回のタイトルから少しばかり逸れてしまいました。話をタイトルにもどしましょう。今夏の一時帰国の際、(そろばん教室に通って来る子どもたちに将来どういうふうになってもらいたいかな)などの質問をされる中(アクラでさえ仕事に就けないでいる若者がいる中、貧しい村出身の子どもは決していい仕事に就けないでしょう。しかし、そろばんをやっていたことで選択肢は増えると思います。)と応えました。一瞬、そろばんに対しての思いからとても良い事を言っているように思われてしまうでしょう。ところが、この時私自身、子どもの将来を(いい仕事に就けない)と決めつけていたのです。一度言葉に出してしまったものは自分の口には戻ってきません。この自分が放った言葉の間違いに気づかされたのがガーナに戻ってきてからでした。ガーナ北部に3年近く住んで日本の大学の仕事をしていた女性と話をしていた時に気づかされたのです。その女性の部下に、子どもの時に太っていたために学校に通わせてもらえず牛飼いの仕事をさせられていた男性がいました。勉強がしたいという思いから直談判を教育関係の人にして良い成績をおさめるのであれば学費を免除するとなり、頑張って勉強して大学に入りそこでも頑張って勉強して良い成績をおさめるのです。まさに周りが決めつけていた考え(太っていたら勉強する資格はない)を変え、自らの手でチャンスを掴んだのです。この男性は、日本人の女性曰く、とても字がきれいで計算も速くできてとても信頼がおける部下だったそうです。この話を聞いて、自分が(貧しい村の出身だからいい仕事に就けない)と決めつけていたことにとっても恥ずかしくなりました。チャンスを掴むのは各々の手、子ども自身の手なのです。私(大人)は子どもたちがチャンスを掴むためのサポートをする立場。子どもたちが持っている可能性を引き出

すサポートをすればいいのです。いい仕事に就けないと思うことはとっても恥ずかしいことなのです。そもそも(いい仕事)というのはいったいどういう仕事なのでしょう。そうした議論になってしまいます。

まずは、子どもたちの明日が今日よりも輝いているように！！というガーナの地に入った時の想いを大切に活動に励んでまいります。

2016年9月30日
スプートニクガーナ
国分敏子



2016年1月 撮影